



曲名 このみち

金子みすゞ 作詞
三宅悠太 作曲

この曲は！

三宅さんはこの詩を、大切に慈しむように作曲されています。最初の1音から最後の小節のフェルマータに至るまで、全てが呼吸しているかのような優れた作品です。金子みすゞの26歳という短い生涯から生まれた言葉、そしてその世界を大切に感じて歌ってほしいと思います。詩を通して作曲者の目線を感じ取れる、学びの深い1曲です。

藤原式練習法

この4連の詩を声に出して味わいましょう。そして、この詩が金子みすゞの生涯の中で、どんな思いで生み出された言葉なのかを大いに想像してみたいと思います。例えば、3行目の「ひとりぼっちの榎」が何を表しているのかだけでも、さまざまな解釈ができるでしょう。「ゆこう」の表記が書き分けられている点も1つのポイントかもしれません。

具体的なアドバイス・ポイント

- ・ [A] のユニゾン、強弱、特にデクレシェンドを見失わないように歌えるとよいでしょう。また、冒頭の上行形のメロディーを正しい音程で歌うことも極めて重要です。[B] は、女声のユニゾンに男声が彩りを添えていきます。「蓮池の」から入るアルトのハモリがきれいにはまると効果的です。[C] から29小節目の「このみちを」に向かっていくgrandioso、そして[D] からのsotto voce、dolceなど、この4連の詩の構成、音楽の構成をしっかり捉えて歌うと、よりよい演奏につながると思います。
- ・ 長いフレーズや上行していくメロディー、低音や高音の響かせ方、そしてきれいな息遣いで歌うことを大切にしましょう。自然に場面が移り変わり、音楽の流れの中でいつの間にか次の詩の連に入る。こうした曲の流れ、起承転結がとても巧みに美しくつくられているので、気持ちを自然にメロディーにのせて歌い上げてください。

この曲を 初めて歌う人

『このみち』は、この曲集の中でもとりわけ優れた作品の1つだと思います。全体を通して[A]のメロディーの変奏によって構成されているので、まずは最初のモチーフをしっかり歌えるように練習し、それを基盤としてその先の音楽的な広がりを楽しみましょう。短い曲の中にも込められたものがたくさんあるので、こうした作品を通してより深い学びを得てほしいと思います。

表現を深めよう

金子みすゞの生涯に思いをはせながら、彼女のその他の作品も味わってほしいです。歌う人のバックボーンが深ければ深いほど、歌い手は言葉に意味をもたせて歌うことができます。そのため、金子みすゞの詩作や生涯、彼女が見つめたものや愛したもののまで、深く紐解いてほしいと思います。

より感動的に 歌い上げるための アドバイス

聴いている人の感性に寄り添って歌うことが大切です。ただ指揮者や先生を見て歌うだけではなく、聴いている人たち、さらに言うとも見えざるもの、果てしないものにも届くように、そこでは聴いていない人の心にも寄り添った演奏ができると、大きな感動につながっていくことでしょう。